



Title	葵巻＜連鎖＞の論理（下）
Author(s)	中井, 賢一
Citation	語文. 2011, 96, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69169">https://hdl.handle.net/11094/69169</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 葵卷〈連鎖〉の論理(下)

## 三 葵卷の「不審な設定」と物語の〈二層〉構造

世の中かはりて後、(―中略―)たゞ春宮(冷泉)をぞ  
(桐壺院は)いと恋しう思ひきこえ給。御後見のなきをうし  
ろめたう思ひきこえて、大将の君によろづ聞こえつけ給ふも  
(光源氏は)かたはらいたきものからうれしとおぼす。

(葵卷二九〇頁)

葵卷冒頭である。傍線部「世の中かはりて」との記述から、桐壺帝から朱雀帝への御代替わりが知られる。前節までにも葵卷の様々な「不審な設定」について取り上げてきたが、この設定もまた、いかにも唐突で「不審」と言わざるを得ないだろう。しかし、この設定にも、実は葵卷でなければならぬ重要な意味があったのである。

紅葉賀巻に「みかどおりゐさせ給はむの御心づかひ近ふなりて、この若宮(冷泉)を坊にと思ひきこえさせ給」(紅葉賀巻二六六

中井賢一

頁)とあり、桐壺帝が、自身の退位と引き替えに冷泉を次期東宮に指名しようとしていたことが知られる。藤壺を中宮に就けたり(紅葉賀巻二六六頁)、それを嫌う弘徽殿女御を説得したり(紅葉賀巻二六七頁)、全ては桐壺帝の、冷泉立坊に向けての具体的工作と言ふべきだろう。新帝即位と同時に新東宮が立坊しない例は、当の桐壺帝の即位時や、先行する『うつほ物語』などに見られるが、どうやらこの時は、新帝即位と同時に新東宮立坊があったようだ。つまり、この「世の中かはりて」との記述は、「桐壺帝の退位」・「朱雀帝の即位」を示すと同時に、「冷泉の立坊」を意味するものでもあるのだ。つまり、葵卷は「冷泉の立坊」から書き起こされた巻である、とも言えるのである。

また、点線部、桐壺院は、東宮冷泉に「御後見のなきをうしろめたう思ひきこえて」、「大将の君」光源氏に「よろづ聞こえつけ給ふ」という。光源氏の「大将」昇任も、これも「唐突」ではあるが、何より注目すべきは、院命によって光源氏が公式に東宮後

見の任に就いた、ということである。村口進介氏は、朱雀帝を支える右大臣方の人事に触れられることなく光源氏の大將昇進と後見就任の事実のみが記される点について、桐壺院の意向を基に構築される「左大臣と光源氏を中心とした朱雀朝体制」の成立と関わらせて読み解かれた。光源氏方に即して語ることがこの物語の一般的手法としてあるから、右大臣方の人事に触れられることがないのは止むを得ないと思うが、右大臣が背後に控える朱雀治世下にあっても、着実に構築されようとしている光源氏の権力体制と不可分のものとしてこの叙述を捉えておられる点、従うべきであろう。加藤洋介氏は、「御後見」について、「桐壺帝は、同時に光源氏を冷泉の『後見』とすることで、光源氏の〈政権〉獲得への道を開いたのである。そこにあるのは、物語が同時代の政治状況と対峙しつつそれを乗り越えるべく敷設された、物語の『後見』の論理である」と説かれ、いわば、光源氏が冷泉の「後見」であることが、「光源氏の〈政権〉」を呼び込む条件として物語内に論理化されている点を指摘された。確かに、落標巻で冷泉の即位が実現し、その後見として政治力を振るうことで光源氏の権力体制は完成されていく。言うまでもなく、その「冷泉帝・後見」の任は、この「冷泉東宮・後見」の任から一連のものであり、「冷泉の立坊」に際しての公式の「御後見」就任は、「冷泉帝・後見」を射程に収めているという意味において、まさに光源氏権力体制の基盤を成すものである。

また、その冷泉が、光源氏と藤壺との「罪の恋」によって生ま

れたのは周知の通りであるが、そうあってみれば、「光源氏権力体制」は、「罪の恋」に立脚し成立するものであると言える。他にも「光源氏権力体制」に関わる人物に明石姫君がいるが、これも光源氏が冷泉を守るべく須磨明石に退去したからこそ生まれ得た。無論「光源氏権力体制」の生成という観点からは、明石姫君ではなく冷泉の果たす意味のほうが大きいことは自明であろう。おそらく、明石姫君は、光源氏亡き後の物語世界に中宮位にあることがその機能として重要で、「光源氏権力体制」との関わりという点では、冷泉とは異なる特別な意義を持っていると思われるが、この件については稿を改めようと思う。

いずれにせよ、「光源氏権力体制」は、「罪の恋」と関わる人物によって、そして、光源氏が先ず冷泉の「後見」として政治力を振るうことによって生成していく性格のものである。つまり、「冷泉の立坊」が実現し、光源氏が公式にその「御後見」の任に当たること、それは、「罪の恋」に立脚する「光源氏権力体制」の実質的始動を意味するのであり、従って、この葵巻冒頭は、朱雀朝下に着実に組み上げられていく「光源氏権力体制」について、その始動を言挙げするものとしてある、と言えるのである。

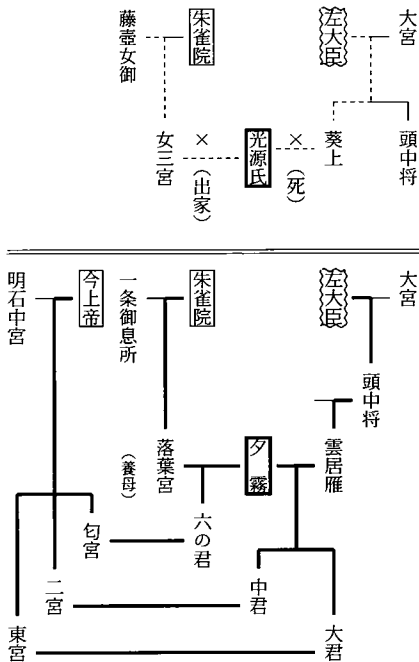
さて、ここで源氏物語の構造的特徴について確認しておかねばならない。私は、旧稿において、源氏物語の物語展開を統括する〈二層〉構造という論理について述べた。この物語が、〈二層〉構造という枠組みの維持を優先し、人物の属性や事件の展開は、それに基づいて設定されている、という規則性である。本稿と関連

都には、対照的な二つの権力体制が存在し、この物語は、その一方の絶対化を一貫して認めない。二つの権力体制のうち、一つは、光源氏を主人公にした「罪の恋と栄華」に關係する「光源氏権力体制」で、もう一つは、夕霧を主人公にした「恋と栄華」に關係する「夕霧権力体制」である。「光源氏権力体制」の「核」は、藤壺との「罪の恋」に由来する冷泉の存在であって、いわゆる政略結婚による権門との連繋やそれを導くような「恋」は力源にはならない。対する「夕霧権力体制」の「核」は、正妻雲居雁との「恋」とその子女たちの政略結婚に由来する権門や皇族との連繋であり、いわば「系図の繁茂」にある。都において、これら対照的な権力体制は、あたかも二つの「層」を成すごとく、相容れることなく両立、併存している。「罪の恋と栄華」のありかたをモチーフとした物語「層」と、「恋と栄華」のありかたをモチーフとした物語「層」とが対峙しているのだ。従って、夕霧と光源氏こそが真の「対照的（二対）」であり、夕霧は一貫して光源氏のアンチテーゼとしてある。また、「光源氏権力体制」は「薫・勾宮・冷泉連繋体制」によって引き継がれ、この「二層」は堅持されるが、物語第三部では、浮舟に主導された「宇治」の力によって、「二層」は、共にその栄華のレベルを弱体化させつつ、それでもいづれかが優位を確保することもなく、閉塞的に対峙を継続させる。

以上のように考えたのであった。特に、光源氏と夕霧の対照性

【系図】

(光源氏の場合)



【系図】内の太線と点線の対照性に注意されたい。光源氏が、左大臣や朱雀院とのコネクションを、葵上の死や女三宮の出家によって断ち切られているのに対し、夕霧は、自身の雲居雁や落葉宮との結婚、そして、子女の結婚を通して、それらコネクションを緊密に張り巡らしえていることが知られよう。「光源氏権力体制」は、藤壺との「罪の恋」と、それに起因する冷泉との関係を基盤とするため、「系図の繁茂」とは全く無縁の性格のものである。対する「夕霧権力体制」は、雲居雁、そして落葉宮との

「恋」や、その子女の政略結婚を基盤とするため、「系図の繁茂」によってこそ拡大していく性格のものである。光源氏がことごとく失う権門(左大臣)や皇族(朱雀院)などの「系図の繁茂」が、夕霧においては、雲居雁、落葉宮との結婚を通じて、極めて効果的に網羅、完遂されることから、両者が、そして、それぞれの権力体制が、「対照的(二対)」として強調されていることは裏付けられよう。では、これまで見てきた葵巻の様々な「不審な設定」も、この両者こそが「対照的(二対)」であるという視角、(二層)構造の論理から読み解くことができるか。

本稿(上)一節で見たとおり、「葵上の死」と「六条御息所の物怪」は、「物語世界に夕霧を『浮上』させる」。夕霧は「葵上の死」後、母方大宮の膝下で養育されることになる。「大宮の膝下」という点が重要である。そこには、雲居雁がいるのだ。夕霧の雲居雁に対する恋心を知った大宮は、「かゝる心のありけるもうつくしうおぼさるゝに、(内大臣が)なさけなくこよなきことのやうにおぼしのためるを、なかさしもあるべき、」(少女巻二九九頁)と考えていた。二箇所傍線部分からは、夕霧と雲居雁の恋を好意的に捉える大宮像が明確に窺える。そもそも大宮は、内大臣(もとの頭中将)とは逆に、むしろ両者を結び付けて良い、と考えている人物なのだ。このような大宮の心性であってみれば、いずれも「大宮の膝下」にいる夕霧と雲居雁とが結び付くのは、むしろ必然的であつただろう。つまり、「浮上」した夕霧は、ただちに(夕霧権力体制)の「核」たる「恋」、雲居雁と

結ばれる環境を手にすることになる。いわば、夕霧を主人公とする「恋と栄華」に関わった(夕霧権力体制)の物語が始動するための環境が、ここで早くも整うのである。

つまり、葵巻において、「光源氏権力体制」の内部に冷泉が「核」として据えられ、また、(夕霧権力体制)の内部に雲居雁が同じく「核」として据えられるのだ。言い換えるならば、葵巻は源氏物語の(二層)が、それぞれ具体的に生成されるさまが描かれる巻なのである。無論、冷泉の即位も夕霧と雲居雁の成婚も、それら自体はこの巻には描かれない。それらが後に現実化するための条件と環境が確定されるという意味において、また、今後の物語展開の枠組みが固定されるという意味において、葵巻は(二層)の対峙の具体的起点なのである。だからこそ、「夕霧の誕生」はこの巻に描かれねばならなかった。対峙すべき光源氏の(層)の核となる「冷泉の立坊」を待って、この巻に描かれねばならなかったのだ。つまり、「夕霧の誕生」が光源氏と葵上の成婚十年後という「不審な設定」は、このために必然化している、と考えるべきなのであり、また、「葵上の死」と「六条御息所の物怪」は、このために「同調」している、と考えるべきなのである。対峙する対照的な(二層)という枠組みが固定されるからこそ、それら(層)の主人公も、速やかにそれぞれの(層)に固定され、その(層)の命題に相応しい物語展開を生かされはじめる。そういった起点として葵巻はあるのであり、そのために、光源氏と夕霧の対峙をセッティングすべく、「葵上の死」、「六条御息所の物

怪」は、それぞれ機能しているのである。

そろそろ、他の「不審な設定」の意味についても答を与えて良さそう。

なぜ、葵上と六条御息所が、「物語世界に夕霧を『浮上』させる」上に、更に、「光源氏の『正妻』の地位を空ける」ことと、『系図の繁茂』の可能性を『消滅』させる」ことを実現せねばならないのか。そして、なぜ、それを紫上が、「長期的に継続させる」のか。それは、「光源氏権力体制」が、〈二層〉構造の論理に則った、常に〈夕霧権力体制〉と対峙しなければならぬ性格のもの、つまり、「系図の繁茂」に依拠してはならない性格のものである。「罪の恋」に立脚すべき「光源氏権力体制」にとって、「系図の繁茂」を利用した権力体制などあつてはならない要素だから、である。

また、なぜ、紫上が、「光源氏が『藤壺に接続』する」状態を、これも「長期的に継続させる」のか。それは、光源氏を常に「罪の恋」に「接続」した状態にすることで、この〈層〉の内部に長期的に固定するため、である。だからこそ、紫上は藤壺との酷似を光源氏に確認されてからしか光源氏との結婚を描かれない、と考えるべきなのである。

では、なぜ、紫上は、葵巻末、「葵上の死」早々に慌ただしく光源氏と結婚することになるのか。もちろん、一つは、「葵上に相当する地位」に他の有力者が滑り込むわずかな時間的余裕さえも与えないようにするため、であろう。しかし、それ以上に重要

な理由は、この葵巻が対照的〈二層〉生成の巻であるから、と私は思う。述べたとおり、「葵上の死」後、夕霧は、直ちに〈夕霧権力体制〉の「核」雲居雁を獲得する。夕霧は「恋と栄華」の〈層〉へと早々と固定されてしまうのだ。そうあつては、光源氏も速やかに「罪の恋と栄華」の〈層〉へと固定されねばならない。〈二層〉は、常に対峙する「対照的」関係になければならない。「葵上の死」があり、「夕霧の誕生」があつた今、この葵巻で直ちに、光源氏は「藤壺に接続」するため紫上と結ばねばならなかつた、と捉えるべきであろう。

最後に、なぜ、「葵上の死」のため、「六条御息所の物怪」という超常現象を利用しなければならなかつたのか、この問題について考えてみよう。

「六条御息所の物怪」は、葵上以外にも紫上、女三宮に憑依する。葵上を死に導き、紫上を衰弱させたあげく受戒させ、女三宮を出家に追いやった。大朝雄二氏が、「光源氏の三人の正妻ないしは正妻格の女性にとりつく怨霊の人」と六条御息所を総括されるゆえんであるが、藤井由紀子氏は、これらに共通する意義について注目した上で、「源氏の性の対象外に押し出す」六条御息所の機能を指摘され、傾聴に値する。このことをもう一歩進めて考えるなら、いわば、葵上、紫上、女三宮は、六条御息所の憑依によって、三人とも出産の可能性が消されているということになる。無論、それは、「光源氏権力体制」から、子女たちによる政略結婚の可能性が、言い換えるなら、「系図の繁茂」の可能性が

切断されることを意味している。光源氏からは、夕霧のような「系図の繁茂」の可能性が、周到に事前に断ち切られているということがある。「葵上の死」から「女三宮の出家」まで、実に二十六年の歳月が流れている。この長きに亘って、光源氏の「系図の繁茂」の可能性をことごとく断ち切り、そのことで光源氏を夕霧と「対照的な（一対）」として固定し続けるため、六条御息所には特別な方法が、つまり「物怪」として憑依するという方法が要請されたのではないか。森一郎氏は、時を越え紫上や女三宮にまで反復される六条御息所の憑依について、「作品構造としてはまたもや『もののけ』かと、増殖感を否めない」とされるが、むしろ、この「増殖感」にこそ六条御息所の機能を読み解く鍵がある。六条御息所は、「超常現象」の「増殖」によって、〈二層〉構造に基づく自らの機能を全うしているのだ。

本稿（上）「はじめに」でも触れたように、藤本勝義氏は、六条御息所の生霊化が特異な現象として「創作」されたと言われた。また、近時では、それに対して今井上氏が、生霊は源氏物語の「創作」のではなく、死霊同様、当時の人々にとってあり得た現象であるとの新見を提示される。しかし、史実がどうあったかあるいは、当時の読み手の享受がどうあったかを検証する意義はあるにせよ、殊、「六条御息所の物怪」が、いかにこの物語の構造と切り結ばれているのかを考える上で、おそらく、それらは重要な問題ではない。重要なのは、「六条御息所の物怪」が、「生霊」、「死霊」と「増殖」することで、長期的かつ説得的に、物語

展開に関与しているという点である。いかに物語が長篇化し、光源氏の間人間関係に変化が生じようとも、物怪の憑依という「超常現象」が発動することによって、光源氏の「系図の繁茂」を、事前に、且つ、説得力を持って断ち切ることができる。物語の〈二層〉の対峙は堅持される。この「超常現象」が、何を断絶すべく、長きに亘って物語内部に機能しているか、そして、その「断絶」が、何を維持すべく、長きに亘って機能しているか、というところにこそ、問題はあるのだ。六条御息所に関わる「超常現象」が、光源氏と夕霧とを対峙的な地平に固定し続ける仕組みとしても、間違いない立ち働いている点、私たちは看過してはならないだろう。

「葵上の死」に纏わる葵巻の「不審な設定」。「六条御息所の物怪」、「紫上の結婚」、そして、十年後の「夕霧の誕生」。これらは、これも唐突で「不審」に見えた「冷泉の立坊」と併せ考えると、この巻の〈二層〉生成という大きな意義と共に、一連の事象としてこの葵巻に論理化され必然化されたものと理解される。いわば、これら一連の事象は、〈二層〉構造の論理に裏打ちされる形で、密接に関わり合いながら、この葵巻に〈連鎖〉しているのだであった。

#### 四 葵巻の〈連鎖〉ともう一つの〈連鎖〉

— ふたたび、「六条御息所の物怪」が導くもの —

葵巻に「不審な設定」が〈連鎖〉する必然性について、そして、

それに葵上、六条御息所、紫上が、機能分担しながら「共同体」のごとく参与していることについて、二層構造の論理と関わらせ考えてきた。

ここで、少し葵巻外部にも視野を拡げておかねばならない。前節でも触れたとおり、「六条御息所の物怪」は、葵上以外にも憑依しているのであるが、一点、紫上に取り憑く時期が妙に遅いことが気になるのである。

「紫上の受戒」は、「六条御息所の物怪」によって現実のものとなる。「ことしは三十七にぞなり給」(若菜下巻三四九頁)とある若菜下巻、三十七歳の春のことである。年立て上は三十九歳のはずだが、そのことは今は問わない。既に、若菜上巻で女三宮の降嫁があり、それによって紫上の立場は難しいものになった。しかし、光源氏は、当の女三宮の幼稚さもあり、結果、紫上に対する愛情を強化することになる。女三宮を訪れた後、光源氏は紫上と比較して、「さし並び目離れず見たてまつり給へる年ごろよりも、対の上(紫上)の御ありさまぞなをありがたく、(―中略―)一夜のほど、あしたの間も恋しくおぼつかなく、いとさしき御心ざしのまさる。」(若菜上巻二四八頁)と考えていた。これまで以上に紫上はすばらしくて、わずかな時間離れても恋しく愛情が勝っていく、という思考からは、この女三宮の一件で、より一層紫上への「御心ざしのまさる」光源氏のありようが明確に窺える。この時、紫上は三十二歳である。間違いない物語は、「六条御息所の物怪」が紫上に取り憑くよう、その展開を仕組まねばなるま

い。光源氏の紫上に対する愛情は、これまでの日々以上に強まっているのだ。「六条御息所の物怪」が、出産の可能性、即ち、「系図の繁茂」の可能性を断ち切るべく発動することは、理に適っている。しかし、なぜそれが若菜下巻の「三十七」歳の時点なのだろうか。光源氏の、紫上に対していや増す愛情が描かれる若菜上巻「三十二歳」の時に取り憑けば良かったのではないか。ここには、「出産の可能性」を断ち切る意義以外の、もう一つの意義が隠されているのではないか。

「紫上の受戒」が記される若菜下巻、この巻頭近くに、次のような一連の記事があったことを思い出したい。

a はかなくて、年月も重なりて、内のみかど(冷泉、御位につかせたまひて、十八年にならせ給ひぬ。「次の君とならせたまふべき御子おはします、もののはへなきに、世中はかなくおぼゆるを、心やすく思ふ人々にも対面し、わたくしざまに心をやりて、のどかに過ぎまほしくなむ」と、年ごろおぼしのたまはせつるを、日ごろいとをもくくなやませたまふ事ありて、にはかにおりみさせたまひぬ。(若菜下巻二三八頁)

b 「いまは、かうおほぞうの住まるならで、のどやかにをこなひをもとなむ思ふ。この世はかばかりと見はてつる心ちする齡にもなりにけり。さりぬべきさまにおぼしゆるしてよ」と、

(紫上は)まめやかに聞こえたまふ(若菜下巻三三〇頁)

a は冷泉退位による御代替わりの記事である。点線部、冷泉の後継断絶が言われる。光源氏がそれを深く嘆く場面を挟み、すぐ



後にbのとおり紫上の言葉が配列されている。紫上は、「のどやかにをこなひをもとなむ思ふ」ので「さりぬべきさまにおぼしゆるしてよ」と光源氏に切願し、光源氏に出家の意志を伝えている。aは冷泉の退位、そして、その直後に記されるbは紫上の出家の意向。冷泉と紫上。

冷泉は、前にも述べたとおり、「光源氏権力体制」の「核」であった。冷泉がいなくては、「光源氏権力体制」は成り立たず、従って「罪の恋と栄華」の〈層〉も生成し得ない。その「冷泉の立坊」が物語に記されたのが、葵巻巻頭であった。そして、「罪の恋と栄華」の〈層〉に、光源氏を長期的に固定するのが紫上であり、その「紫上の結婚」が実現したのが、葵巻巻末であった。

「光源氏権力体制」の現実化や長期化に大きく寄与する二人である。そして、今、若菜下巻で「冷泉の退位」があり、その直後に紫上の出家願望が述べられ、若菜下巻後半で、「紫上の受戒」が現実のものとなる。片や政権を手放し、片や世俗を捨てるのである。若菜下巻では、冷泉と紫上の二人が、「光源氏権力体制」から共に去る姿が描かれていると言って良い。葵巻では、冷泉と紫上とが「光源氏権力体制」に共に参与し、若菜下巻では、二人がそこから共に離脱する。いわば、葵巻と若菜下巻は、「光源氏権力体制」の生成を支えた二人の人物の登場と退場を描く、という点で完全に呼応しているのだ。

この「呼応」には注目して良い。「光源氏権力体制」が、「冷泉の立坊」によって具体的に始動したということは、「冷泉の退位」

は、当然、現行の「光源氏権力体制」の具体的終結を意味するはずである。今ある「光源氏権力体制」が、その「核」を失ったにも拘わらず、何らの変質もなくそのままの効力を持続させうるとは考えにくい。

また、紫上によって、光源氏は、そして「光源氏権力体制」は、「罪の恋と栄華」の〈層〉に固定されたのであった。「冷泉の退位」によって、「光源氏権力体制」が終結した今、もはや紫上がこの「光源氏権力体制」を「罪の恋と栄華」の〈層〉に固定する必然性はなくなるはずであろう。だからこそ、紫上は、冷泉退位と同じ巻、若菜下巻で、「受戒」を描かれ、世俗の権力機構から解放されるのではないか。

もはや、言を俟つまい。この物語の「罪の恋と栄華」の〈層〉は、若菜下巻を区切りに、光源氏その人にこの〈層〉の主題を担わせることを止める、と考えるべきなのだ。いわば、若菜下巻は、「罪の恋と栄華」の〈層〉の主人公の《代替わり》を言挙げする巻なのである。光源氏の政治的な盛衰が、この〈層〉の中心テーマから外れることを言挙げする巻なのである。

では、この〈層〉はこれからどうなるのか。二つの〈層〉のいずれかが他方に優越することを認めないのが〈二層〉構造の論理だったはずである。前節の〈二層〉論の要約部分で触れたとおりだからこそ、〈薫・匂宮・冷泉連繫体制〉がこの〈層〉を受け継ぐべく、引き続いて要請されることになるのだ。それを証するかのように、同じ若菜下巻に、「匂宮の出生」が描かれ（若菜下巻

三九九頁)、そして、「薫の出生」の由来となる「柏木と女三宮の密通」が描かれる(若菜下巻三六二―三六七頁)ではないか。しかも、その「密通」は、「六条御息所の物怪」が紫上に憑依したことで六条院が閑散とした隙に発生しているではないか。冷泉が退位によって表舞台から後方に回り、匂宮が誕生し、そして、薫の命も宿る。薫と匂宮、そして薫らを後方支援する冷泉。まさに「罪の恋」と関わった〈薫・匂宮・冷泉連繫体制〉の構図が、その萌芽が、ここ若菜下巻に見て取れよう。源氏物語後半の物語展開を規制する新たな「二層」の枠組みが、ここ若菜下巻に生成するのである。

物語は、「光源氏権力体制」の終結を言挙げするため、新たにその後継を必要とした。「罪の恋と栄華」の〈層〉は、光源氏の「罪の恋」を参照する薫を中心に形成される〈薫・匂宮・冷泉連繫体制〉を必要としたのである。「柏木と女三宮の密通」が、他の巻でなく若菜下巻に発生するのも、それによって薫の命が宿るのも、決して偶然ではない。〈薫・匂宮・冷泉連繫体制〉の枠組みが生成してこそ、「六条御息所の物怪」は、「紫上の受戒」を現実化させたのだ。だからこそ「紫上の受戒」は、「三十七」歳まで延引されねばならなかったのだ。確かな〈薫・匂宮・冷泉連繫体制〉の萌芽があればこそ、「六条御息所の物怪」は、「罪の恋と栄華」の〈層〉の《代替わり》を實行しうるのだ。

そういえば、本稿(上)一節でも述べたとおり、「六条御息所の物怪」は、「二層」生成のため、「夕霧の誕生」を待ってから、

「葵上の死」を現実化した。ここでも「六条御息所の物怪」は、〈薫・匂宮・冷泉連繫体制〉の生成、つまり、新たな「二層」生成のため、「薫の出生」の芽、「柏木と女三宮の密通」を待ってから、「紫上の受戒」を現実化している。「六条御息所の物怪」は、「二層」の対峙の「出発点」と、《代替わり》、つまり「再出発点」について、完全に統括しているのである。いわば、六条御息所は、「二層」構造の長期的統括者として機能する人物なのであり、「六条御息所の物怪」には、このような、もう一つの重要な意義が課されていたのである。

「六条御息所の物怪」は、「紫上の受戒」を呼び込み、そして、その「紫上の受戒」は、「冷泉の退位」とともに、「光源氏権力体制」の終末を、さらには、「罪の恋と栄華」の〈層〉の《代替わり》をも導く。そして、この〈層〉を引き継ぐ〈薫・匂宮・冷泉連繫体制〉が、確実に形成されていく。つまり、「罪の恋と栄華」の〈層〉の《代替わり》を必要とした「二層」構造の論理に基づき、「冷泉の退位」、「六条御息所の物怪」、「紫上の受戒」、「薫・匂宮・冷泉連繫体制」の萌芽は、この若菜下巻に、これも〈連鎖〉しているのである。

若菜下巻の〈連鎖〉を、葵巻の〈連鎖〉と比較してみよう。

葵巻の《連鎖》	若菜下巻の《連鎖》
六条御息所の物怪	六条御息所の物怪
冷泉の立坊	冷泉の退位
紫上の結婚	紫上の受戒
「光源氏権力体制」の枠組み 生成	「光源氏権力体制」の終結 薫・匂宮・冷泉連繫体制の枠組み 生成
《夕霧権力体制》の枠組み生成	《夕霧権力体制》の継続 生成
↓《二層》の生成	↓新たな《二層》の生成 〔「罪の恋と栄華」の《層》《代替わり》〕

見てのとおり、葵巻の《連鎖》と、若菜下巻の《連鎖》とが、きれいな照応関係にあることが分かる。いわば、若菜下巻は、葵巻の《連鎖》に「呼応」する「もう一つの《連鎖》」によって組み上げられた巻なのである。

若菜上巻以降、光源氏が様々な意味で力を失っていく、という一般的な把握に異論はなからう。そして、このことが、女三宮の降嫁と関わっている、という把握にも異論はなからう。三田村雅子氏が指摘されるように、「表層の取り繕いを優先する」ばかりの六条院は、「女三宮という新しい北の方を付け加えることによって、その栄華を空洞化する」と言っている<sup>21</sup>。この「もうひとつの《連鎖》」も、おそらく、このことと関わって必然的に発生している。ただし、私は、「女三宮の降嫁」が六条院の

秩序を乱して光源氏が力を失ったがゆえにこの《層》の《代替わり》が促進された、などと言うつもりはない。そうではなく、「女三宮の降嫁」が、光源氏の《層》のありかたに反するから《代替わり》が必然化されるのである。「女三宮の降嫁」が、夕霧の《層》のありかたと軌を一にするから光源氏の《層》の《代替わり》が必然化されるのである。しかも、光源氏は、女三宮が二品になった後、紫上と女三宮に「渡り給こと、やうくひとときやうになりゆく」（若菜下巻三三八頁）という。二人の妻に均等に通うよう配慮する、というありかたは、雲居雁と落葉宮に「夜ごとに十五日づつ」（匂宮巻二一四頁）通う夕霧のそれと完全に重なる。夕霧の場合、雲居雁と落葉宮が、いずれも国母の母になる可能性を有していたがゆえに、両者を対等に処遇するというのは、将来を見据えた政治的戦略として有効な方法であった<sup>22</sup>。しかし、これは、「糸図の繁茂」を権力体制の力源にする夕霧の《層》でのみ効力を発揮する方法なのであって、光源氏の《層》で追求されるべきそれではない。「女三宮の降嫁」を受容する光源氏のありかたは、《二層》の堅持を優先するこの物語の論理に抵触する。だからこそ、光源氏は、力を失わねばならないのである。逆に言うなら、《二層》の長期的対峙をにらんだ物語の論理によって、光源氏が《代替わり》を迎えるよう物語展開はコントロールされ、結果、女三宮という人物が要請されるのである。ことほどさように、この物語の展開は、《二層》構造と深く関わっているのだ。なお、女三宮の降嫁が現実化する若菜上巻には、若菜下巻

の「もう一つの〈連鎖〉」のため、周到に伏線が張り巡らされている。朱雀院がクローズアップされることも、臘月夜が再登場することも、おそらくそれと関わっている。この点については、稿を改めようと思う。

「光源氏権力体制」の始点が葵巻に、また終点が若菜下巻に配置され、そして、若菜下巻には、それと入れ替わるように〈薫・匂宮・冷泉連繫体制〉の確かな萌芽が配置されている。葵巻の、朱雀帝への「御代替わり」とともに〈二層〉の対峙は起動する。そして、若菜下巻の、冷泉帝から今上帝への「御代替わり」とともに、「罪の恋と栄華」の〈層〉においては、「光源氏権力体制」から〈薫・匂宮・冷泉連繫体制〉に、〈代替わり〉する。言い換えるなら、また新たな〈二層〉の対峙が起動するのである。〈二層〉の対峙の始発を共に担う巻という意味においても、葵巻と若菜下巻は、完全に「呼応」してあるのだ。

葵巻の〈連鎖〉と若菜下巻の「もうひとつの〈連鎖〉」。そして、葵巻と若菜下巻の「呼応」。全ては、葵巻の〈連鎖〉から始まった。「不審な設定」の下、次々に発生する事件から始まった。それらは、全て必然性をもって葵巻に、そして、若菜下巻に配置されている。〈二層〉の生成と長期的対峙を必然化するため、葵巻の〈連鎖〉、そして、若菜下巻の「もう一つの〈連鎖〉」は立ち働いている。六条御息所、葵上、紫上、冷泉、そして夕霧。全ては、〈二層〉構造の論理が組織化した〈連鎖〉なのであった。

## おわりに

光源氏が主導する「罪の恋と栄華」の物語〈層〉と、同じく夕霧が主導する「恋と栄華」の物語〈層〉が、対峙の関係性をもって生成することを言挙げする巻として、そして、それら〈二層〉が、この物語の展開を制御する枠組みとして起動することを言挙げする巻として、葵巻は捉えられねばならない。

〈二層〉構造の枠組みが具体的に生成する起点として葵巻を捉えるとき、この巻の様々な「不審な設定」が、確かな意味をもって有機的に結ばれていく。この巻の事件をかたちづくる人物たちの、その人物造型の必然性が、確かな意味をもって繋がっていく。「六条御息所の物怪」、「葵上の死」、「夕霧の誕生」、「紫上の結婚」、そして「冷泉の立坊」。これらは、同じ葵巻に配置されなければならなかった。全ては〈連鎖〉しなければならなかったのである。そして、この〈連鎖〉は、遠く若菜下巻内部に「もうひとつの〈連鎖〉」を呼び込み必然化する。葵巻と若菜下巻の「呼応」を必然化する。〈二層〉構造の堅持という論理が、葵巻と若菜下巻を結び付ける、と考えるべきなのであり、そして、物語の展開をコントロールする、と考えるべきなのである。その意味において、葵巻に散見される「不審な設定」の配列は、源氏物語の全体構造に占めるこの巻の重さを、実に雄弁に物語る徴表としてあった、ということになるだろう。

注

- (12) 村口進介氏「葵巻冒頭の光源氏について―政治と官職の視点から―」(『むらさき』第四十輯 平成15年12月)
- (13) 加藤洋介氏「冷泉―光源氏体制と『後見』―源氏物語における准拠と『虚構』―」(『研究講座源氏物語の視界2』新典社 平成7年5月)
- (14) 以下の一連の拙稿。「夕霧〈不在〉の論理―夕霧の機能と物語の〈二層 構造〉―」(『國語國文』第七十四巻第十号 平成17年10月)、「夕霧〈太政大臣予言〉の論理―〈夕霧権力体制〉の誤算と物語の〈二層 構造〉―」(『國語國文』第七十六巻第六号 平成19年6月)、「夜」とに十五日づつ―通う夕霧―浮舟の機能と物語の〈二層 構造〉―」(『古代中世文学論考』第二十集 新典社 平成19年10月)、「宇治十帖〈解体〉と〈閉塞〉の論理(上)・(下)」(『詞林』第四十一号 平成19年4月・「詞林」第四十二号 平成19年10月)。
- 匂宮巻頭の光源氏後継者に夕霧の名が挙がらない点、光源氏と夕霧が〈一対〉たりうる点、夕霧〈太政大臣予言〉が物語内に実現しない点、夕霧が不自然にも雲居雁と落葉宮に「十五日づつ」通う点、第三部の【系図】が動かなくなる点、等と、〈二層〉構造の論理との関わりを、物語の具体的表現を起点に論じている。併せ参照されたい。
- (15) 大朝雄二氏「六条御息所の苦悩」(『講座源氏物語の世界』第三集 有斐閣 昭和56年2月)
- (16) 藤井由紀子氏「『源氏物語』魂の系譜―『夢』と『物の怪』を視座として―」(『古代中世文学論考』第一集 新典社 平成10年10月)
- (17) 森一郎氏「人物の付着的造型」(『源氏物語生成論』世界思想社 昭和61年4月)

(18) (1) に同じ

- (19) 今井上氏「平安朝の遊離魂現象と『源氏物語』―葵巻の虚と実―」(『源氏物語 表現の理路』笠間書院 平成20年6月)
- (20) 拙稿「夕霧〈太政大臣予言〉の論理―〈夕霧権力体制〉の誤算と物語の〈二層 構造〉―」(『國語國文』第七十六巻第六号 平成19年6月)
- (21) 三田村雅子氏「他者のまなざし・他者の空間」(『源氏物語―物語空間を読む』ちくま新書 平成9年1月)
- (22) 拙稿「夜」とに十五日づつ―通う夕霧―浮舟の機能と物語の〈二層 構造〉―」(『古代中世文学論考』第二十集 新典社 平成19年10月)

(なかい・けんいち 宇部工業高等専門学校准教授)